

学校・校外生活と無業者

堀 有喜衣(お茶の水女子大学大学院)

1. 問題設定と調査の概要

(1) 問題設定

本発表は、都市部の進路多様校における学校への関与が低い若者の分析を通して、どのような者たちが高卒無業者およびフリーターになるのかについて明らかにしようとするものである。

近年、都市部の特に進路多様校における高校生の進路は、他の地域とは異なる様相を見せている。進学者の増加と高卒就職者の激減、そして高校を卒業しても進学も就職もしない「高卒無業者」が高い社会的関心を集めているのである。昨年、発表者も参加している「高卒無業者研究会」は、都市部の進路多様校の高校2年生を対象とした調査をもとに、①進路多様校の生徒は学校への関与を弱める一方、校外生活に対するコミットメントを強めている②生徒の校内・校外生活のあり方と進路展望には関連が見られるが、特に校外生活への傾倒がフリーター志向を高めていること、を明らかにした(耳塚寛明研究代表2000)。

このようなわれわれの調査分析から導かれた生徒像は、1980年代までの高校生の進路分化研究が描き出した「脱学校的」生徒類型とはややおもむきを異にする。80年代までの研究は、学校タイプ・成績ランク(トラック)の位置に応じた下位文化による社会化過程を通じて、進路が円滑に分化する側面を描き出してきた。つまり学校と同調することにより将来高い社会的地位が見込める上位トラックにいる生徒は「向学校」的になり、そうした保証がない時に地位への欲求不満から「反学校」「脱学校」の方向に向かう(岩木・耳塚1981)。こうしたプロセスを経て、高校生の進路は主に「就職」か「進学」のどちらかに決定されていたのである。しかしながら都市部の進路多様校においてはフリーター志向に見られるように、高校2年生の段階では、生徒文化を通じた進路の水路づけに成功していなかった。

本発表は昨年の報告に引き続き、高卒無業者率が高いという特徴を持つ都市部の進路多様校に焦点付け、学校への関与を切り口として、誰が無業者になるのかという問題を解いてみたい。大都市部において高卒無業者率が集中して高いのはよく知られた事実だが、高卒無業者率は地方においても高まる兆しを見せている。また、学

校関与の低下は程度の差こそあれ高校教育システムの大きな流れであり、例えばある地方高校の2時点調査を行なった樋田らの研究グループは、かつて学校のタイプによってある程度規定されていたトラックと進路の結びつきが不明確化し、また高校生の生活世界の中で学校外世界の比重が増大するとともに、相対的に学校へのコミットメントが低くなっていることを指摘している(樋田・耳塚・岩木・荻谷編著2000)。本発表で対象とする都市部の進路多様校は、こうした傾向が著しく表れた部分であると位置づけられる。むしろ地方と都市部では置かれた状況が異なっており、単純な比較はできないことは言うまでもない。けれども先行研究が示したように、学校への関与と進路分化が不可分であるならば、都市部の進路多様校の分析は、無業者率が高くなり学校関与が低下した時に、誰が無業者として析出されているのかという知見を提供する。つまり都市部の進路多様校を学校への関与という視点から分析することは、今後学校関与が低下し、かつ高卒無業者率増加の可能性を持つ日本の高校教育システムのゆくえを占う上で重要な示唆を与える可能性を持つのである。

ところでわれわれの研究は、都市部の進路多様校の生徒は学校への関与が薄く、学校の外に対してのコミットが非常に高いこと、そしてこうした生徒の割合が無視できない割合にのぼることをすでに指摘している。このような現象は、生活時間の中において部分的に「高校生をする」若者の増加と理解できる。こうした短時間だけ学校に関わる若者は、言ってみれば何かの合間にパートタイムで「高校生」をしているようなものである(小杉2001)。仮にここではこうした生徒を「パートタイム生徒」と呼ぼう。

この「パートタイム生徒」は学校へのコミットメントという観点から見た、進路多様校によく見られる若者のひとつの表象である。本稿では「パートタイム生徒」を数量的に概念化するにあたりその指標として、生活の中において学校のための時間をどの程度割くかというシンプルな基準—登校時間どおりに学校へ来るか、あるいはそもそも登校してくるか否か—を用いることにした。

具体的には調査表の質問項目として、<高校3年生になってから遅刻を何回ぐらいしましたか

>という設問に対して、<遅刻 51 回以上>と答えた者、あるいは<高校 3 年になってからの欠席日数は何日くらいですか(出席停止・きびき・公休を除く)>という質問に対して<欠席日数 21 日以上>と答えた者のどちらかにあてはまる者を「パートタイム生徒」と呼ぶことにしたい。この数字は本発表で用いる調査において最も遅刻・欠席が多いカテゴリーであるという技術上の理由に主によっている。

以下ではまずパートタイム生徒の実像を、校内生活と校外生活、および家庭的背景から捉える。続いてパートタイム生徒と将来展望、さらに進路選択、とりわけフリーターとの関連を取り上げて考察を加える。

(2) 調査の概要

本発表で用いるデータは「高卒無業者研究会」(耳塚寛明(主査)・小杉礼子・佐藤(粒来)香・長須 正明・大道 真佐美・堀有喜衣・諸田裕子)が行なった以下の調査を基にしている。

① 高校 3 年生対象の質問紙調査

対象:東京都に所在する高等学校 17 校に在学する高校 3 年生 調査対象校は相対的に無業者を多く出しているいわゆる進路多様校。地域的なバランスと学科を考慮して対象校を選定し、調査をご承諾頂いた 17 都立高校の 3 年生 2131 名に対して行われた。普通科 11 校、専門学科 6 校。

調査時期:2001年 1 月

調査方法:質問紙による集団自計式調査

調査内容:校内・校外生活の過ごし方および予定進路

回収票の構成:性別<男子 905 名 女子 1167 名 無回答 59 名> 学科別<普通科 1297 名 農業科 180 名 工業科 165 名 商業科 489 名> 予定進路別<正社員内定 447 名 正社員未定 93 名 専門・各種決定 485 名 専門・各種未定 116 名 短大決定 116 名 短大未定 30 名 四大決定 174 名 四大未定 201 名 フリーター 300 名 家業手伝い 20 名 その他 38 名 全く決めていない 49 名 無回答 62 名>

② 高校 2 年生対象の質問紙調査

対象:東京都に所在する高等学校 21 校に在学する高校 3 年生 調査対象校は相対的に無業者を多く出しているいわゆる進路多様校。地域的なバランスと学科を考慮して対象校を選定し、調査をご承諾頂いた 21 都立高校の 2 年生 2476 名に対して行われた。普通科 13 校(含その他)、

専門学科 8 校。

調査時期:1999 年 11 月～2001 年 1 月

調査方法:質問紙による集団自計式調査

調査内容:校内・校外生活の過ごし方および進路展望

回収票の構成:性別<男子 1106 名 女子 1341 名> 学科別<普通科 1752 名 農業・家政科 105 名 工業科 246 名 商業科 373 名> 進路希望別<就職 640 名 フリーター 91 名 専門・各種 742 名 短大 119 名 四年制大学 591 名 その他 69 名 わからない 205 名>

③ 高校 2 年生から高校 3 年生にかけてのパネル調査

「高卒無業者研究会」が行なった①高校 3 年生対象の調査と、②高校 2 年生対象の調査について、記入してもらった氏名あるいは出席番号をもとに 2 つのデータを照らし合わせ、追跡できた対象者のみを取り出し、2 つのデータを結合させて作成した。その結果、16 校(普通科 10 校 専門学科 6 校)、1045 名のパネルデータを得た。

回収票の構成:性別<男子 482 名 女子 556 名 無回答 7 名> 学科別<普通科 579 名 農業・家政科 46 名 工業科 147 名 商業科 273 名> 予定進路別<正社員内定 259 名 正社員未定 32 名 専門・各種決定 213 名 専門・各種未定 55 名 短大決定 63 名 短大未定 16 名 四大決定 104 名 四大未定 90 名 フリーター 126 名 家業手伝い 8 名 その他 30 名 全く決めていない 24 名 無回答 25 名>

2. パートタイム生徒の校内生活(省略)

3. パートタイム生徒の校外生活(省略)

4. パートタイム生徒の家庭的背景(省略)

5. パートタイム生徒の将来展望(省略)

6. パートタイム生徒の予定進路(省略)

7. 考察—あらたな「集団」の出現か あるいは顕在化か(省略)

<図表・参考文献などはすべて省略 発表は当日配布のレジュメに沿って行ないます>